

配偶者を呼ぶことば

— 「主人」をめぐって —

遠藤 織枝

はじめに

結婚した女が自分の配偶者を他人に言うときどう表現するか。

現在の話しことばで最も一般的に使われるのは「幸い主人もそれで左遷される
というようなことはありませんので…」(NHK総合テレビ85.9.24 a.m.8:35)
のように「主人」である。(下線 遠藤、以下同じ)

だが、「主人」とはもともと「わがぬしとしてつかふるひと(『ことばのはやし』1889)であって、現在の夫婦関係を表すことばとして適当でないのでは
ないか。また、外国人に日本語を教える場合、外国の既婚女性に「主人」と言わせる
のが妥当かどうか、が今回の調査で知りたいと思った点である。

外国人用の日本語教科書には家族関係を教える課がたいていある。そこでは
「わたしの主人 あなたのご主人」(『日本語教科書初級』早稲田大学語学教
育研究所編、P179)

「主人はすぐ参りますから」(『日本語』国際学会友会日本語学校、P194)

「主人は体の調子が悪いのに、病院に行こうとしなないんですよ」(『日本語表
現文型中級I』筑波大学日本語教育研究会、P196)

と妻が自分の配偶者を呼ぶことばとして「主人」が示されている。

自国語では「愛人 ai·ren」(中国語)と呼び「my husband」(英語)「mein
mann」(ドイツ語)「mon mari」(フランス語)「МОЙ МУЖ」(ロシア語)
(いずれも「私の夫」と表現している女性に日本語は「主人」だから「主人」
と言いなさい、と教えるのにためらいを感じずこともある。「主人」という呼称
には隷属の意味合いが感じられるし、夫と隷属関係にないと思われる外国女性に
までそれをおしつけない気がする。他に適当なことばは皆無なのだろうか。

この「主人」は、それではいつごろから夫を表す語として日本女性の中で使わ
れるようになったのであろうか。現在最も一般的に使われるのはなぜなのか。他
にもっとふさわしい呼び方はないのか。こうした点について調べて考えてみた。

1. 「主人」をめぐる新聞とTV

3年前にNHKのテレビ番組「日本語再発見」で「気になることば—主人」というのが放映された(1982.9.17)。

その内容を要約すると次のようになる。

- (1) 町でアナウンサーのインタビューに答えた既婚女性の呼び方は圧倒的に「主人」であった。
- (2) NHK総合放送研究所のアンケート調査では以下のようであった。

主 人	63 %	
(お)父さん	18 %	
(お)父ちゃん		
うちの人	10 %	
(お)じいさん	5 %	
(お)じいちゃん		
姓	2 %	
夫	1 %	(1979)

そして改まれば改まるほど主人の比率が高くなるとコメントが加えられていた。

- (3) 雑誌『クロワッサン』の調査では

夫のよび方についての回答は

主 人	64.4 %
夫	5.0 %

夫をこう呼びたい、の回答としては

主 人	38.0 %
夫	16.3 %

で「主人」と呼びたい人は実際に呼んでいる人の半分しかいない。

- (4) 丸岡秀子氏は1955年第1回母親大会で「主人と呼ばず夫と呼びましょう」と提唱したが、そのもとになるのは丸岡氏の次のような経験だった。大正時代からの氏の先輩、師とする女性で「主人」と言っている人はいなかった。

平塚雷鳥は姓で夫を呼び、長谷川時雨は「つれあい」と、岡本かの子は「一平」、神近市子、奥むめおは姓で夫を呼んでいた。

- (5) 1975年国際婦人年のメキシコの大会で「ミズで呼ぼう」と提案された。
「国際婦人年をきっかけに行動を起こす会」では「主人」を「夫、つれあい、配偶者」に、「ご主人」を「ご夫君」へ呼び改めるようNHKへ提案した。
- (6) 「主人」は他にいいことばがなくてやむをえず使っていることば。—『わいふ』編集長 田中喜美子氏。
- (7) 「主人」と呼んで自分を下と考えるのはこじつけと劣等感の表れ。主従関係ではなくタテマエとして呼んでいるだけ。むこうが「主人」なら私は「女主人」と思っている — 井上好子氏。
- (8) 他の呼び方として「つれあい」という良いことばがある。
もろさわようこ氏からきた弔電「おつれあいさまのご逝去を悼み…」がいちばん嬉しかった — 金森トシエ氏。
- (9) 身の上相談の回答に相手の配偶者を決して「ご主人」と呼ばないで「夫君」と呼んでいる人がいる — 小室加代子氏。
- (10) 言いにくいとされた「夫」を使う人がふえてきた。宝塚市「愛の手の裸婦像」設置に反対する婦人グループでは、反対運動を進めていくうちに自分の使う「主人」がおかしいと思いだした。「つれあい」「夫」「おとうちゃん」などに呼びかえている。

京都市のある生活改善グループでは、女がものを言っているという20年にわたる運動の中で、『主人』というところにいる人のよう、『夫』というとき近くに感じ、『夫』という方が温かみがある』『夫』ということではじめて夫婦が本当に一心同体になった気がする」と感じるようになった、と言っている。

また、これより10年前には、『朝日新聞』（以下『朝日』と略記）の家庭欄に「むずかしい『主人』追放」という特集がなされた（1972.5.26）。この記事では「『夫』と呼びたいが」という25歳の主婦の投書がきっかけとなって以下の内容のことがとりあげられている。

(1) 大阪府立消費生活センターの講習会に集まった20代から60代の婦人60人のアンケート調査の結果、あらたまった場では夫のことを主人という48人(80%)、姓でいう6人(10%)、夫という人4人(7%)。「夫」と答えた4人のうち3人は隣近所など親しい者の間では「主人」と呼ぶと答えていて純粹の「夫」組は60人中ただ1人である。

(2) すでに、1955年の第1回日本母親大会の申し合わせ事項に「主人といわず夫といおう」という項目が入っていた。

(3) たかがことばの問題で目くじらをたてることはないという声もある。ことばは一種の符号だ、語源がどうであろうと現在ではそれが「夫」を指すことばとして使われているならそれでいいではないか、という意見もある。

一方、言語学者の寿岳章子さんは「主人からあるじの意味が完全に消えてしまっているならかまわないけど、商店や町工場などにはまだ主従関係を意味する主人ということばが生きている。あるじを連想することばである以上、女性史的立場からみてこれを使うことはやはり問題ですね」という。

(4) 自分の夫は「夫」と呼ぶとして他人の夫はどう呼ばいいか。「だんなさん」「ご亭主」では「ご主人」と同様上下関係の意味合いが残るとすると「ご夫君」「おつれあい」「夫サン」などが候補にのぼるがどれも使い慣れてないから語呂が悪かったりしてしっくりこない。丸岡秀子さんは「夫サン」をとる。「お宅のご主人はという方がはるかに気楽だが、抵抗があるからこそつとめて使わなくては。これが進歩につながる」という意見。

これらのテレビ番組(以下「NHK」と略記)と新聞の特集記事(以下「'72朝日」とする)に「主人」という呼び方に関する問題点が集約されていると考えられるので、以下、その問題点と照らし合わせる形で論をすすめたいと思う。

II-1 現在の話しことばでの呼び方

「NHK」(1)(2)のアンケート調査と「'72朝日」の(1)60人中純粹の「夫」派1人という結果と比べるため次のような設問でアンケート調査を行った。

設問 配偶者の呼び方を調べています。あなたの日常のことばに○印をつけてくださいませんか。

A 夫の勤務先の上司・同僚に言うとき

いつも { 主人
夫
○○(姓)
その他() } がお世話になっております。

B 友達に言うとき

これ { 主人
夫
○○(姓)
亭主
その他() } が買ってくれたのよ

C PTAなどで

{ 主人
夫
たく
○○(姓)
その他() } は子供とよく遊んでくれますので助かります。

表 1 話しことばの中の配偶者の呼び方（全体）

8.5.9月調査

	主 人	主 人 以 外										計		
		姓	夫	彼 ・ 氏	省 略 ※	ババ・おとうさん	亭 主	だんな・だんな様	名前・名前さん	うち・うちの 人	つれ あ い		ハ ズ	父 親
設問 A 改まった場合	97 78.9	17 13.8	2 1.6	1 0.8	4 3.3	2 1.6								123 100%
設問 C やや改まった場合	94 80.3	6 5.1	6 5.1	1 0.9		2 1.7			3 2.7				5 4.3	117 100%
設問 B ややくだけた場合	84 61.8	7 5.1	3 2.2	4 2.9		8 5.9	7 5.1	9 6.6	7 5.1	3 2.2	2 1.5	2 1.5		136 100%

（1人でふたつ以上の呼び方を答えたり、PTAなどに該当しないとした人もいて、各合計は回答者の合計と一致していない）

※ 省略とは「いつも（ ）がお世話になっております。」の（ ）部分を言わない、ということ。

表 2 話しことばの中の配偶者の呼び方(年齢別)

		20代 3名	30代 33名	40代 48名	50代 19名	60代 12名	70代 7名	計 122名
㊤ 改まった場合	主人	2	27	39	17	8	4	97
	姓	1	3	5	1	4	3	17
	夫		1	1				2
	彼・彼氏		1					1
	省略		1	3				4
	パパ・おとうさん			1	1			2
㊤ PTAなどや改まった場合	主人	1	25	36	15	11	6	94
	姓	1	1	2	2			6
	夫		3	2	1			6
	彼		1					1
	パパ・おとうさん			1		1		2
	うち		1	2				3
	父親			4	1			5
㊤ ややくだだけた場合	主人		21	35	14	8	6	84
	姓		3	1	2	1		7
	夫		1	1	1			3
	彼・彼氏		3	1				4
	パパ・おとうさん			5		3		8
	亭主		1	5	1			7
	だんな・だんな様	1	4	4				9
	名前・名前さん	2	3	2				7
	うちの人			2	1			3
	つれあい		1		1			2
ハズ			1	1			2	

この3問につき、日常の話しことばとしてどれを使うか選んでもらった。
(実際の発話をとらえたものではないので、実態と多少のずれはあるかもしれない)。対象は主として東京杉並区在住の20代～70代のサラリーマン家庭の主婦122名である。

その全体の結果が表1である。

A、Cの改まった場面では「主人」が80%以上を占めている。次にくるのは夫の勤務先との会話では「姓」で、PTAなどでは「夫」と「姓」である。

Bのくだけた場面では「主人」が65.4%で、A、Cよりかなり減り、また、呼び方がバラエティーに富んでくる。

これらは、「NHK」、「'72朝日」と調査方法などが異なるので同列に比較することはできないが傾向はほとんどかわっていない。

また、このアンケート結果を年齢別に分けると表2のようになる。20代、70代では数名の回答しか得られなかったため、比率を出すことはせず実数だけ示した。

ここで目につくのは、Aの場面で姓で呼ぶ人が高齢者に多いことである。60代70代の19名のうち7人36.8%がAのような改まった場面では姓で呼ぶと答えている。

「主人」と呼ぶ人はA、Cの場面では年代による差はほとんどみられないが、Bの場面では、30代が33名中21名63.6%、40代48名中35名72.9%、50代19名中14名73.7%と年齢が上がるにつれ、多くなっている。くだけた場面では「主人」以外を使う人が若い層に多いということである。

II-2 「主人」の歴史

1955年の母親大会に「主人といわず夫といおう」とのスローガンが掲げられていた背景には、その当時、夫を「主人」と呼ぶ女性が圧倒的に多かった事実があるはずである。

では、配偶者を「主人」と呼ぶようになったのはいったいいつごろなのであろうか。明治時代の辞書と、当時の新聞を中心に調べてみた。

I-2-a 辞書の中の「主人」

「主人」の語自体は漢籍に由来し^{注1}古くから使われているが、この語が「夫の呼称」——妻から配偶者を呼ぶ言い方——として使われるようになったのはいつからであろうか。

江戸期・明治初期の辞書には「夫の呼称」としての語義は与えられていない。

(1) 『易林本節用集^{注2}』には

主^{しゅ}・主人^{しゅじん}・夫^{ふう}・檀那^{だんな}・主^{しゅ}と明治以後夫を表すようになった語が記載されているが、当時「夫」以外の語にも「夫」の意味が加わっていたかどうかかわからない。その他に夫の意で用いられた「やど」は、同節用集では乾坤の部に「宿」として示されている。ここでは夫の意味はないものとして処理されている。

(2) 『日葡辞書』(1663)^{注3}では夫を表したと思われる語は以下のように記されている。

Aruji	アルジ	(主)	主人、女主人、または物の持主
Teixu	テイシュ	(亭主)	すなわち Iyeno nuxi (家の主) 家の主人
Votto	ロット	(夫)	夫
Xujin	シュジン	(主人)	主人
Xū	シュウ	(主)	主人、主君
Nuxi	ヌシ	(主)	物の持主、主人、あるいは女主人
Yado	ヤド	(宿)	家
Vchi	ウチ	(内、中)	…の内部、または…する間

ここでも Votto 以外には夫を表した語は見当たらない。

明治初期に入って和英辞書が多く出されるが、それらの辞書の「Shujin」の英訳に「husband」が加えられるのは明治も終わって大正期に入ってからである。

(3) 和英語林集成 初版(1867)3版(1887)とも

Shujin シュジン 主人(nushi, aruji) Lord, master

(4) 新選和英辞書 1894(博文館)

Shujin Lord, master

(5) 和英大辞典 1896 (三省堂)

Shujin 主人 Lord or master, shu, aruji, nushi

(6) 井上和英大辞典 1921 (至誠堂)

Shujin a master, a householder (一家の)
a host (客に対し), a landlord (旅館の)
an employer (雇主), one's husband (夫)

1921 (大正10)年の辞書に初めて夫の語義が加えられているのである。

1924 (大正13)年の『スタンダード和英大辞典』の「^{東京}宝文館」版には husband の記述は見当たらないが、同年の同辞書「宝文館」出版のものに one's husband の記述がみられる。以後『斎藤和英大辞典』(1930)『研究社和英大辞典』(1931)とどの辞書にも husband の記述は見られるようになる。1924年がひとつの境界といえる。

ところで、夫を表す他の語の和英辞書の記述にはどんな推移がみられるか、「亭主」、「あるじ」の2語について同じように調べてみた。

辞書	あるじ	亭主
(3) 和英語林集成	Lord, master, landlord	The master of a house head of a family <u>a husband</u>
(4) 新選和英辞書	Lord, master, landlord owner	The master of a house head of a family <u>a husband</u>
(5) 和英大辞典	Master, lord, <u>husband</u> the head of a household owner	① The master of a house, Landlord ② <u>a husband</u>

「亭主」ではヘボンの初版からすでに husband の英訳がつけられているが、「あるじ」は (5) の辞書に初めて夫の英語が加えられた。(5) の『和英大辞典』の Aruji の項目には、あるじ・主人と平仮名・漢字がつけられている。あるじを「主人」と当てるのはヘボンの初版からすでに行われており、ヘボンでは

Aruji→アルジ→主人(shujin)と表記されている。(5)ではArujiを「主人」と当てているだけであるが、ヘボンではArujiを「主人」と当て、さらにこの漢字の音読(shujin)も添えている。

次に英和辞書のhusbandに「主人」の語釈が与えられているかどうか。『英和对訳袖珍辞書』(1862)ヘボン、『英和字彙』(1881)、『ウェブスター氏和訳字彙』(1888)から降って、『大英和辞典』(市川三喜1931)そして現在刊行中の『リーダーズ英和辞典』(研究社1984)に至るまで、どの辞書にもhusbandの和訳に「主人」のことは見当たらない。

なお『ウェブスター氏…』のhusbandの項目中my husbandの語には良夫(ヤド)の和訳がつけられている。この辞書では、妻が自分の夫を呼ぶ日本語として「ヤド」が最も妥当と思われることが窺われる。

では国語辞書はどうか。明治20年代からのいくつかの辞書で「主人」をひくと次のような語釈が与えられている。

- (6) 『ことばのはやし』(1889 物集高見)
わがぬしとしてつかふるひと。
- (7) 『言海』 (1890 大槻文彦) (一)家ノ主。アルジ。
(二)己が仕フル君。シュウ。
- (8) 『日本大辞書』(1893 山田美妙)我が主トシテ我が仕ヘル人。
転ジテ家のあるじ。
- (9) 『ことばのいづみ』(1899 落合直文) (一)わが仕ふる人。
(二)一家のあるじ。
- (10) 『辞林』 (1908 金沢庄三郎) (一)あるじ。ぬし。
(二)自分のつかふる人。ダンナ。
- (11) 『大日本国語辞典』(1915 上田萬年) ⊖あるじ。ぬし。⊕自分の雇はれ居る人。自分の仕ふる人。しゅう。
- (12) 『辞苑』 (1935 新村 出) ⊖一家のあるじ。⊕雇傭関係における雇主。自己の仕へる人。だんな。
- (13) 『大辞典』 (1936 平凡社) 家のあるじ。

1930年代昭和10年代に入っても「主人」に夫の呼称であるという語釈は記されていない。ここまでの辞書では「主人」は①家の主。②自分が仕える人。③自分が雇われている人。の語義しか与えられていない。

戦後の辞書をもてみる。

- (14) 『小言林』 (1949 新村 出 全国書房) ⊖一家のあるじ ⊖雇傭関係における雇主。自分の仕える人。だんな。 ⊖妻が夫をいう称。
- (15) 『辞海』 (1952 金田一京助 三省堂) ⊖一家のあるじ ⊖妻が他人に対して自分の夫をさす語。 ⊖自分の仕える人。
- (16) 『明解国語辞典』 (1952 金田一京助 三省堂) ⊖あるじ ⊖自分の仕えている人。だんな。
- (17) 『広辞苑』 (1955 新村 出 岩波書店) ⊖一家のあるじ ⊖雇傭関係における雇主。自分の仕える人。だんな。 ⊖妻が夫を指していう称。

戦後になってはじめて「主人」の語義の一つが「妻からの呼称」とであると示されるようになった。戦後でも(16)にはまだ記されていない。1955年の『広辞苑』以降になると『広辞林』(1958 三省堂)『岩波国語辞典』(1963)とどの辞書にもこの種の語釈がつけ加えられるようになったのである。

辞書にみる限り「主人」に「妻から夫を指す称」と認められたのはまだ35年前にすぎないのである。

注1 『暮らしのことば辞典』佐藤喜代治編 講談社1985.P139

注2 『五本対照改編節用集』亀井 孝 勉誠社1973

注3 土井忠生 邦訳版 岩波書店1980

Ⅱ-2-b 新聞の「主人」と「夫」

明治中期以降現在にいたるまで新聞で「夫の呼称」とくに「主人」と「夫」がどう記されているかを調べてみた。一部の新聞であるが、いくつかの時点で調べることとした。

— 明治 30 年ごろ —

この頃の「夫の呼称」の実情を知るために明治 33 (1900) 年創刊の『婦女新聞』を対象にした。この新聞は毎週 1 回発行され、女性を啓蒙し穏健な家庭を理想とする立場で刊行されていた。

同紙の創刊当時の記事で妻が夫を「主人」と呼んでいる例はない。〇〇夫人談などの記事の中に出てくるのは「をっと」「やど」「あるじ」である。(仮名遣いは原文のまま、字体は現代字体)

- ① 私と亡夫とは育て方の方針は少しちがって居りましたけれど…(M 34 = 1901.3.18 45 号訪問記事)
- ② 主人は常に留守勝ちですからもう馴れて何とも思ひません。(M 37 = 1904.3.28 203 号)
- ③ 何も運命でございます。良人は立派な戦死をとげたのでございますから。(M 37.6.3 214 号)
- ④ 夫の出征はかねて覚悟です。(M 37.7.18 219 号)

「をっと」の漢字は「夫、良人、良夫、亡夫」などいくようにも当てられているが、ルビに従って「をっと」と処理した。

和辞書の Aruji の表記が「主人」であったことには先に述べたが、実際使用例にも②のようにあるじの語に「主人」を当てている例がみられる。「あるじ」に夫の意味は早くから認められているわけであるから、その「あるじ」を「主人」と当てれば、次には「主人」という言い方が夫の呼称として使われるようになるのも当然のなりゆきであったと思われる。つまり、自分の夫を指す語として「あるじ」を用いる。和語である「あるじ」を同意義の「主人」という漢字で当てる。この時点では「あるじ」が中心で「主人」は仮に当てられた漢字にすぎない。しかし、時間を経るにつれて「主人」は本来の音読みの「しゅじん」と置き換えられていく。

主 人

|| → シュジン

アルジ → アルジ

図示すれば上のようになり、「わが家のアルジが」と言っていたのが「わが家の

シュジンが」と変わっていくことは当然の推移と考えられる。これはよくひきあいに
出される「おおね」→「大根」→「大根」と全く同じ経過をたどっている。これは「をっと」にも同じことが言える。「をっと」を漢語由来の同意語の「良人」と当てる場合がある。「良人」の表記で「おっと」と読ませているうちに、本来の音読み「りようじん」が復活してくる例である。

- ⑤ 最愛の良人^{りやうじん}を墓場に送る苦しみに打ち勝つ力は唯一つある。(M 37 = 1904.3.28 203号)

こうした漢語化は、また、当時の女性の使うことばの和語から漢語への変化の流れ^{注1}にもそうものである。

なお、この当時「主人」の例もないわけではない。

- ⑥ 食事に招かれた時は少しも時間を違へずに参りますが、これは自分一人のために他の客を待たせ、従って主人^{しゅじん}に迷惑をかけてはならぬといふ……
(M 35 = 1902.2.3)

のような例である。ここでは先の和英辞書の語義にもあった客に対する「a host」の意味で使われているのであって「夫の呼称」としてではない。

「夫の呼称」として「主人^{しゅじん}」が出てくるのは

- ⑦ 私の内では主人^{しゅじん}がオィオィと呼びますと下女が出ます。(M 35 = 1905.3.27 255号)

が『婦女新聞』では最初の例である。この「主人^{しゅじん}」は筆者である「赤門出某の妻」からみた「夫の呼称」であると同時に、下女を含めた家人からみた「家のあるじ」でもある。

この例にみられるように、当初「主人」は「自分の夫」であるのと、「わが家の中心人物」であるとして用いられるのと、はっきり区別がつかない用い方がされていた。つまり当時妻が「主人」と呼ぶ場合①本来の語義「わが仕ふる人、わが家のあるじ」としての夫を描いている^{注1}②夫を意味する「あるじ」(この語も主であることに変わりはない)→「主人」→「主人^{しゅじん}」と変化した語と考えるの2方向からの意識が混ざりあっていただと考えられる。

一方、同じ時期の『婦女新聞』の「家庭面」に次のような記事が載っている。

夫の三人称

他人に対して夫の言行を語る場合の談話語、これ亦なかなかむつかしいものです。他人に対して語る場合、夫の事を何といへばよろしいでせう？（中略）『夫』『良人』『旦那』『主人』『亭主』『あるじ』『うち』『わたしとこ』などが一般に用ゐられてをる様です。（中略）今行はれてをるものの中でいへば『あるじ』などが語調の上からも語感（主人と同義なれど今は同義異感となつてゐる）の上からもよいかと思ひますがどうでせう？（後略）

（M 38. 2. 27 家庭子）

ここでは談話語として「夫の呼称」に「をっと」以下「わたしとこ」までの8語が挙げられている。その中に「主人」も含まれている。『婦女新聞』の記事中の使用例としては⑦の1例しか採集できなかったが、それは文章語だからである。話しことばでは明治38年ごろ「主人」もかなり使われていたことはこの文章から推測される。

なお今回の調査では文字に残されたものを対象にしているため、実際の話しことばで用いられていた談話語としての「夫の呼称」とは区別して考えることが必要である。

— 明治40年ごろ —

文章語として「夫の呼称」では「夫」が最も一般的という傾向は明治末期、大正期へと続いている。

『婦女新聞』では明治42（1909）年1月から14回にわたり「妻君の見たる良人」という読者の投書を掲載している。その投書者である14人の妻が自分の配偶者をどう呼んでいるかをまとめてみる。ルビはついているのもいないのも全て元の新聞に従つた。

- ① 夫 ② 夫 ③ 主人 ④ 良人 ⑤ 夫 ⑥ 夫 ⑦ 夫 ⑧ 良人 ⑨ 良人
⑩ 夫 ⑪ 良人 ⑫ 良人 ⑬ 良人・主人 ⑭ 良人・良人

同一人物が2様の呼び方をしている例も2例あり、計16例の呼称が挙げられている。これを文字遣いは無視して呼び方でまとめると

「をっと」12、「りやうじん」2、「しゅじん」2

である。「しゅじん」2例のうち1例は「をっ」と併用している。純粋に「しゅじん」と呼ぶ人は14人中1人であったと言える。

ところで、この当時「主人^{しゅじん}」の語は新聞紙上で珍しい語ではなかった。『東京日日新聞』（以下『東日』と略記する）に掲載された小説「富と愛」（柳川春葉）に次のような「主人」が使われている。

- ⑧ （錦子）「恰度主人^{しゅじん}は不在ですし、お客と申しても他にございませんからどなたでもお友達をお誘引遊ばして…」（『東日』M40.1.21）
- ⑨ 静子「お察し申しますよ」
龍沢「お察し申すなら少々御主人^{しゅじん}を大事にしろ！」（M40.1.21）
- ⑩ 大隅家の秘密ですから申されませんが先代の主人^{しゅじん}に遺言がありまして…」（M40.2.2）
- ⑪ 「はい」と家従^{かじゆう}は草履を揃へおそるおそる主人^{しゅじん}の挙動^{やうどう}に注意してゐる（M40.2.15）

この4例のうち「夫の呼称」であるものは⑧だけで、⑨は妻に対して夫が自分のことを指す語⑩は大隅家の当主⑪は従者の仕える人としての主人、となっている。

— 大正5年ごろ —

次いで大正期をみることにする。

『東京日日新聞』では大正5（1916）年2月から「家庭問答」という読者の質問に答える欄が設けられている。家庭全般の質疑であるから、妻からの夫に関する質問ばかりが載るわけでもなく、毎週何曜日ときめられた常設欄でもないため1年を通して「夫の呼称」はわずか14例しか採集できなかった。その14例には

- ⑫ 不幸にして夫^{まつと}が死亡しますと本家の兄は預金通帳と実印を持って行ってしまひました（煩悶女）（T5=1916.2.25）
- ⑬ 私の連合^{つれあひ}は酒飲みで誠に困ります（浅草女）（T5.5.1）

- ⑭ ^{しゅじん}主人の友人が見えました時に其方に悪い感じをさせぬやうにして…その席へ出て斡旋することの可否をお伺ひします。(豊橋愛読女)

(T 5. 6. 29)

などがあり、14例の内訳は

「をっと」12 「つれあひ」1 「しゅじん」1

であった。これは明治42(1909)年の傾向とほとんど変わっていない。

当時の一般記事の中で○○夫人談というような談話記事では

- ⑮ 上田敏博士未亡人談

「^{しゅじん}主人の死があまりに急であったため遺言も何もありませんが、私には^{しゅじん}良人の考へてみたことがよくわかってゐますから…」

(T 5. 9. 17)

- ⑯ ^{もとの}本野子爵夫人

「^{しゅじん}主人は今朝八時頃からどこかへ出かけました」(T 5. 11. 21)

のように「しゅじん」が使われている。大正5年当時こうした記事にとりあげられる一流夫人の談話での「夫の呼称」は「しゅじん」であつたらしいことがわかる。

なお、「家庭問答」の読者からの質問に

- ⑰ 私方の^{しゅじん}主人が本年7月に死去しましたが、正月の儀式はどう致すべきでせう。(T 5 12. 26)

とあつたところ、その回答に「続きあひがわかりませんから確とした御答は出来ませんが…」と述べられていた。つまりこの当時、「私方の主人」とだけ書かれたのでは、「おっと」と受けとられることはなく、どういう関係にあるのかもわからない、とされていたことがわかる。現在「私方の主人」と言えばふつうの場合「おっと」と解釈するはずであるが、70年前にはそうではなかつたのである。

— 昭和10年ごろ —

さらに20年後の昭和10(1935)年ごろの「夫の呼称」はどうであつたか。当時の『東京日日新聞』には「アスクアス」という、主として家庭の悩みを訴

え、その回答を求める欄が設けられていた。また『朝日新聞』（以下『朝日』と略す）には「女性相談」という女性からの相談に答える欄があった。これらの相談者の投書の文面から「夫の呼称」を拾い出してみた。「アスクアス」欄は昭和9年3月から1年分、「女性相談」欄は昭和10年1月から1年分である。両紙の読者からの投書による文章の中に用いられた「夫の呼称」の種類と頻度数、比率を示したのが表3である。

表3 昭和10年ごろの新聞の「夫の呼称」

呼 称	夫	主 人	彼	頭文字 (T.Kなど)	計
『東 日』	86	37	0	0	123
「アスクアス」欄	69.9%	30.1%	0	0	100%
『朝 日』	136	18	2	2	158
「女性相談」欄	86.1%	11.4%	1.2%	1.2%	100%
2 紙 合 計	222	55	2	2	281
平 均	79.0%	19.6%	0.7%	0.7%	100%

「アスクアス」欄と「女性相談」欄で「主人」の頻度にひらきがあるが、全体として「主人」はまだ少数派であったことがわかる。その理由として考えられることは、①「夫の呼称」として使われだして30年ぐらしかたっていない、②「主人」は先の辞書の語釈でみた「雇う者」の意味で使われることが度々あって、それとの混同をさける意識が働いたのではないか、という点である。このころの相談に次のようなものが出てくる

- ⑱ 私は19歳で女中奉公にきました。主人は50を3つ4つ過ぎ御夫人も同じ位です。御主人と人目を盗む仲になりました。主人は酔いも甘いも通ってきた人です。(初恋に悩む女) (『朝日』S10=1935.1.8)
- ⑲ 17歳の芸者です。芸者をやめて真面目に暮さうと思ひその旨主人に話し

ましたら前借を全部返せと言います。(悩める若葉より)

(『朝日』S 10. 1. 10)

- ⑳ 現在の家に参り、且那様に汚されてしまひました。御兄弟も私に身を引けと言ひ私もさう思ひますが、主人はどうしても聞き入れません。(かく子)

(『東日』S 9 = 1934. 4. 3)

のような「主人」である。ここで使われる「主人」は⑱ ㉑では女中奉公している自分を雇っている人であり⑲では芸者として身を置いている置屋の主である。こうした「主人」に関する相談も多く『東日』のアスクアス欄で13例(1年間)、『朝日』の「女性相談」欄で11例採集している。若い女性が経済的理由で女中奉公したり、芸者屋に身を置くということがそれほど特殊な事例でなかった昭和10年ごろの世相を反映していることになる。こうした「主人」本来の使い方が頻繁であれば、「夫の呼称」としてあとから加わった「主人」が、それほど多く出てこないのも当然であろう。

— 昭和28・9年ごろ —

太平洋戦争の激動の中で、新聞もページは少なく、しかもタブロイド版で辛うじて発行される時期が続いた。そうした時期には、10年代にはかなりの紙面をさしていた読者の相談や投書は全く影をひそめてしまっているので、「夫の呼称」がどうであったかなど調べる手がかりは少ない。戦後、新聞も徐々に紙面を取り戻し、戦前のような家庭面が復活してきたが、女性読者の投書を定期的に掲載するようになったのは『朝日』の「ひととき」が昭和27年1月であり、『毎日新聞』の「女の気持」が昭和29年9月であった。「ひととき」「女の気持」ともはじめは著名女性に依頼して寄稿してもらう形をとっていたが、上記の年月から読者の投書にきりかえられた。

「ひととき」昭和27年5月から1年分と、同時期の『毎日』の「読売相談室」昭和28年1月から8月までと「女の気持」昭和29年9月から12月の両欄合わせて1年分の「夫の呼称」を拾ってみた。それぞれあまり多く採集できなかったので全部あわせて比率を出したのが表4である。

表 4 昭和 28.9 年の新聞の「夫の呼称」

呼 称	夫	主 人	彼	計
「ひととき」	47	48	1	96
「女の気持」等	49.0%	50.0%	1.0%	100.0%

ここでは昭和 10 年代にみられたような、女中からの「主人」、芸者置屋の「主人」といった「主人」は一切出てこない。そして「夫の呼称」としての「主人」が「夫」と肩を並べるに至っている。戦争をはさんだ 20 年間に「主人」がすっかり浸透したのである。

こうした書きことばで「主人」が半数を占めるようになった背景に、活しことばではさらに多くの比率で「主人」が使われてきたのであろう事実が予想される。そうした「主人」の優勢ぶりから昭和 30（1955）年の母親大会のスローガンが出てきたのであろう。母親大会の申し合わせ事項には次のように書かれている。

…私達のまわりに根強く残っている封建制のために昔ながらの考えから抜けられず古い人間関係の中で人々は喘いでいるのです。……私達は婦人同志のねたみやしつとなどの古い垢を洗い落とし、立場の違いや考え方の違いがあっても、たくさんある共通の問題を話し合い、少しでも人間改造を志し、活動することが大切だと確認しました。主人を夫と言いましょう。父兄と言わないで父母といたしましょう。どんなことも夫にきいてからと言わずに自分で考えましょう。
（後略）（『たちあがる母のこえ—日本母親大会の記』1955. 7月
母親大会準備会偏）

この提唱者丸岡秀子氏は「主人」と呼ぶことは封建制の名残りだと捉えていて、夫に従属しないで生きるために「主人」と呼ぶことは改めようと呼びかけているのである。

— 昭和 39 年ごろ —

母親大会の呼びかけから 10 年、「夫の呼称」がどう変化したか、『朝日』の「身上相談」と「ひととき」欄の読者の投書の文面で調べてみた。「身上相談」は昭和 38 年 11 月から開設された。そこで昭和 38 年 11 月から 1 年間の「身上相談」と同時期の「ひととき」から「夫の呼称」を集めてみた。それをまとめたのが表 5 である。

表 5 昭和 39 年ごろの新聞の「夫の呼称」

呼 称	夫	主 人	彼	亭 主	計
『朝日』 「身上相談」	91 59.1%	59 38.3%	4 2.6%	0 0	154 100%
『朝日』 「ひととき」	45 47.9%	46 48.9%	2 2.1%	1 1.1%	94 100%
合 計	136	105	6	1	248
平 均	54.8%	42.4%	2.4%	0.4%	100%

身上相談欄と「ひととき」欄とで「夫」と「主人」の比率はやや異なるが、これは「ひととき」欄の方が日常語に近いことばが使われ、身上相談の方がやや改まった文章語が使われるというためと思われる。「ひととき」で「夫」と「主人」が半々であることは昭和 28・9 年の結果と全く同じである。母親大会のスローガンは何の影響も与えていないのであろうか。

— そして現在 —

現在の新聞の「夫の呼称」はどうなっているか。『朝日』の「ひととき」「いわせてもらおう」「ちょっと変だわ」と『毎日』の「女の気持」「みんな集合」「ちょっとおばあちゃん」など読者の投書で構成されている欄から拾った。身上

相談は『朝日』『毎日』にはなく『読売新聞』に「人生相談」として連日掲載されている。1985年1月～9月の『朝日』『毎日』の上記欄と同1月～8月までの『読売』の「人生相談」から「夫の呼称」を拾い出し、投書者の年代別に整理したのが表6である。また、「人生相談」は少し傾向が異なるので、それ以外のものとわけてみた。(表7)

表6 現在の新聞の「夫の呼称」(年齢別)

呼称	夫	主人	亭主	旦那 旦那様	うちの人	つれあい	計
20代	18	40			2		60
30代	54	57	2	1		1	115
40代	48	51	2	1			102
50代	32	31		1			64
60代	12	21					33
70代	10	5	1				16
年代不明	14	4					18
計	188 46.2%	208 51.1%	5 1.2%	3 0.7%	2 0.5%	1 0.3%	408 100%

表7 人生相談とそれ以外

呼称	夫	主人	その他	計
「人生相談」	41 41.4%	58 58.6%	0	99 100%
それ以外	147 47.7%	150 48.7%	11 3.6%	308 100%

この結果「ひととき」などの投書欄の「夫」と「主人」の比率は約同率で、これは表5の20年前とほぼ同じである。身上相談は20年前と現在の「人生相談」の中の「夫」と「主人」の比率が逆転していて、現在では「主人」6対「夫」4の比になっている。

年代別では、20代と60代で「主人」が「夫」よりはるかに多いのが目立っている。70代は総数16で少ないがこの年代では「夫」が「主人」より多く、倍になっている。

昭和初期から現在までの推移をみるため表3～表6をまとめたのが表8である。

表8 新聞の「夫の呼称」推移

呼称	夫	主人	彼	亭主	うちの人	頭文字	だんな だんな様	つれあい	計
昭和9年ごろ	222 79.0%	55 19.6%	2 0.7%	0	0	2 0.7%	0	0	281 100%
昭和29年ごろ	47 49.0%	48 50.0%	1 1.0%	0	0	0	0	0	96 100%
昭和39年ごろ	136 54.8%	105 42.4%	6 2.4%	1 0.4%	0	0	0	0	248 100%
現在	188 46.2%	208 51.1%	0	5 1.2%	2 0.5%	0	3 0.7%	1 0.3%	408 100%

以上「主人」の歴史を辞書と新聞でたどってみた。辞書では、明治初期は①主従関係の下の方の立場の者から上の立場の者 ②もの、家などの持ち主の2つの意味が認められ、大正期になって ③雇用関係の雇う側の人、の意味が加わった。和英辞書ではさらに④客に対してもてなす側の人 ⑤妻に対する夫の意味が加えら

れてくる。

「主人」が「夫をさす語」として辞書に認知されたのは大正期後半であった。

一方、新聞で夫の意の「主人」が表れるのは明治 30 年代後半であるが、大正から昭和前期までは「夫」の方が主流を占めていた。戦後は「夫」と同じくらい使われるようになってきて現在では「夫」を上回る傾向がみられる。

注 1 『女のことば誌』杉本つとむ 雄山閣 1985 P 198

注 2 「女大学」に「婦人は別に主君なし。夫を主人と思ひ、敬ひ慎みて事べし」とある。（『日本思想大系』岩波書店 P 203）

II-「主人」は符号か

『72 朝日』の特集の中に、「ことばは一種の符号だ、語源がどうあれ現在それが「夫」を指すことばとして使われているならそれでいい」という意見があるのに対して、それについて寿岳章子氏が、「主従関係を意味する主人ということばが生きている以上これを使うことは問題だ」と述べている旨紹介されていた。

その後 13 年を経た現在、「夫の呼称」として「主人」を使う人はほかにないからとか、符号だからとかの理由で話しことばで 6 割以上、書きことばも半数以上に及んでいる。その現在にあって、「主人」が夫を指すだけのことばに変質しているか—つまり語源的な主従関係の中での「主人」の意味が完全に消えているか—を考えてみたい。

身の回りにあるごく一般的な新聞・雑誌をちょっと注意するだけで次のような使用例が目止まる。

- ① 戦後民主主義は、残念ながら健在なのである。民衆は「われわれが主人なのだ」と叫びつづけている。

西部邁「戦後民主主義の傲慢」（『毎日』'85. 8. 23 夕刊）

- ② 山下「（セントルイスでは）結構過激なレコード屋の主人から、とにかくブルースがなきジャズじゃない。日本人なんかブルースがあるわけないからおまえなんかジャズなんかできないといわれて。」

（山下洋輔『週刊朝日』'85. 9. 27）

- ㉓ 詩人のIが誰にも知られることなく死んだ。彼の生前の借金のかたに私は当然のように彼の家を引き取った。(中略)あれから十余年、その間に私は詩を書くことを覚え、この家の主人として名実ともにおさまってしまった。一色真理「迷宮」(『毎日』'85.8.23 夕刊)
- ㉔ 「私の主人」を探して下さい 大田で迷子のキュウカンチョウ
(『毎日』'85.9.8 見出し)

㉑の「主人」は、従来の国家や君主への隷属関係を断ち切った、主従関係の上に立つものとしての主人。㉒は店の持ち主、雇用主。㉓は家の持ち主。㉔は飼い主、とそれぞれ語源的意味をそのままに持ちこんだ「主人」である。単なる符号ではなく、名実ともに支配し従属させ所有する主体としての「主人」である。

このような本来の主従関係の上にたつ「主人」は、特別古い文献でなくても現在日常的に目にふれるごく一般的に刊行物に使われている。とすれば、「夫の呼称」である「主人」だけを主従関係のない単なる符号と切り離して処理することはできなくなるのではないか。たとえその本人は主従関係を捨て去った符号として「主人」を使っているとしても——現実にそのような女性は多いが——そのことが発せられたあとも、社会的に単なる符号として受け取られる保証はないのではないか。

13年前に寿岳氏の述べられたように、現在においても「符号だからとして『主人』を使うことには問題がある」ことにかわりがない。

Ⅲ－相手の配偶者のよび方

「'72朝日」の(4)は自分の場合は「夫」と言えるが、相手の配偶者を呼ぶ良い呼び方がないという内容の記事であった。その後の「NHK」では「主人」「ご主人」に代わるいくつかの呼び方も紹介されていた。

この「'72朝日」に「使い慣れていないからしっくりこない」という箇所がある。

たしかに、現在では「主人」「ご主人」が使い慣れていて、「夫」「つれあい」「夫さん」などは使い慣れていないこととも言える。しかしことばは自然に任せ

ていて新しい語が使い慣れてくるものではない。「お手伝いさん」にしても「共働き」にしても初めは使い慣れていなくてしっくりこなかった。それが「女中」や「共稼ぎ」のマイナスイメージを払拭するために新しく「お手伝いさん」「共働き」が作り出され「女中」「共稼ぎ」よりよいことばと意識されるにしたがって、いつのまにか使い慣れるようになってきた。現在では「お手伝いさん」「共働き」は使い慣れないからしっくりこないなどとは誰も言わなくなっている。

「夫」や「つれあい」が「主人」に比べて使い慣れないからやはり「主人」でいい、ということにはならないのである。現に歴史的にみた結果でもわかるように初めは夫を「主人」と呼ぶことはなかった。「主人」の方が使い慣れないことばで、「やど」「あるじ」「つれあい」「亭主」などの方が使い慣れていた。それがこの7,80年の間に変化し、逆転して現在では「主人」が最も使い慣れたことばになっているにすぎないのである。

使い慣れていることが最も適なことばであるとはかぎらないのである。

さて、相手の「夫の呼称」にもどるが、これを今までみてきた新聞の相談欄などで、回答者がどのように呼んでいるか調べてみた。

最も初期の大正5年当時は

㊸〔質〕 良人はなす事万事非常に下劣で…

〔答〕 …夫を知らずに貴女を愛している良人は思へば気の毒な人です。

(『東日』T5=1916.4.19)

と、回答者も質問者と同じ「良人は」と呼んでいる例がある。

昭和9年ごろの相談欄では、質問者が「夫が」と言っても回答者が必ずしも「夫」で答えていない。質問者の「主人が」に対しても「ご主人」以外の呼び方も交えて回答がなされている。質問者が「夫」と呼んでいる場合の回答者の呼び方に次のようなものがある。

㊹〔質〕 夫は五十五歳で会社員 私は四十八歳で…

〔答〕 妾に奪はれてしまつてゐる夫の心は今さしあたりどうにもならないとして… (『朝日』S10=1935.1.21)

㊺〔質〕 八年前今の夫と結婚しましたが…

〔答〕 御良人が本意なのを無理に帰る理由が判然しません。

(『東日』S 9 = 1934. 5. 2)

⑳〔質〕 去年夫が死去いたしましてから毎月見知らぬ母子連れが墓参りにまわります。…

〔答〕 夫君が生前それを告白して事実の証拠が上がってゐるならやむをえませんが。(『東日』S 9. 7. 19)

㉑〔質〕 五・六年も浪人をしてゐる夫の妻でございます。…

〔答〕 あなたのお連れ合ひは少しも非難のできない人です。
(『東日』S 9. 9. 8)

㉒〔質〕 夫は真剣に過去の不貞を白状せよとせめます。…

〔答〕 御主人の御話は全くの貴女に対する不満の口実であります。
(『東日』S 9. 6. 28)

「夫」で問うているのに対する回答は「夫」で答えるのが数の上では最も多いが、上の例のように「御良人」「夫君」「お連れ合ひ」「御主人」と4通りの呼び方で答えているのである。

次に「主人」で質問したのに対する回答の呼び方をみる

㉓〔質〕 主人がふとした心の迷ひからある女性と親しくなりました。

〔答〕 あなたの主人がその婦人をだましたことになります。
(『朝日』S 10. 4. 24)

㉔〔質〕 主人は狭気肌の人ですから口には何も言ひませんが

〔答〕 御主人の心には其の余裕があまりにならない。(『朝日』S 10. 5. 29)

㉕〔質〕 主人はある女給にだまされてゐて私は世の苦悩の限りを味はったものでございます。

〔答〕 その婦人と夫との関係がもう今では断たれているものなら…
(『東日』S 9. 12. 29)

㉖〔質〕 三年前今の主人と一緒になりました。

〔答〕 幸ひあなたは良い御良人を御持ちなのですから。
(『東日』S 9. 11. 21)

㉗〔質〕 主人は某会社の技師でしたが

〔答〕 夫君の遺言は三人の子供の養育費として… (『東日』S 9. 8. 1)

のように「主人」で尋ねたのに対しても「主人」「御主人」「夫君」と、いく種類もの呼び方で答えている。

これが昭和39年の身上相談になると、2, 3種類に限られてくる。

「夫」で尋ねたのに対しては

③⑥〔質〕 夫が抑留生活の留守中だけが、夫の圧迫から解放された平和な日々でした。

〔答〕 何のプラスにもならない夫のようにみえます。

(『朝日』S39=1964.4.2)

③⑦〔質〕 夫は四十三歳、私どもは恋愛結婚で…

〔答〕 ご主人は若い女の魅力におぼれて

(『朝日』S39.4.11)

の2種類だけ、「主人」で尋ねたのに対しても

③⑧〔質〕 最近主人の弟が失業して住込んで働くようになりました。

〔答〕 ご主人の弟さんですから… (『朝日』S39.5.31)

③⑨〔質〕 主人は開業医ですがどちらかというと学究はだで…

〔答〕 だんなさまのいうとおり… (『朝日』S39.6.30)

の2通りしかない。そしてこの年代の回答者の呼び方としては「夫」を用いた質問に対しても、「主人」を用いた質問に対しても、ほとんど「ご主人」で答えるようになっている。ここに昭和9年代との大きな違いがみられる。ヴァリエーションに富んでいた呼び方が画一化されてきているのである。

こうした事実をうけて「'72朝日」のような「ご主人」以外は使い慣れなくてしっくりこないという記事が生まれたといえるのであろう。

ところが現在の『読売新聞』の「人生相談」の欄では、20年前昭和39年当時の身上相談とは少し違った傾向が表れている。回答者で「ご主人」と呼ぶ例が少なくなり、「夫の呼称」にヴァリエーションが出てきている。戦前の変化のある呼び方にもどってきている。

④④〔質〕 夫は楽道家で私の苦況をわかってくれませんか…

〔答〕 あなたは夫を恨んでいるようですが (『読売』85.4.23)

④〔質〕 主人は仕事を趣味に忙しくてお話になりません。
〔答〕 おつれあいに協力してもらうように話し合ってみてください。
(『読売』85. 5. 22)

④②〔質〕 主人の浮気に苦しんでいます。
〔答〕 困った亭主ですね。(『読売』85. 5. 29)

④③〔質〕 かけごとの好きな夫のことで相談します。
〔答〕 夫君は「二十年目の浮気」病にかかっているのかもしれませんが。
(『読売』85. 7. 28)

「主人は」で尋ねているのに対しても「ご主人は」と答えるとは限らず、回答者の呼び方にも変化がみられるようになっている。

これは「NHK」の(8)(9)を裏づける一つの現象といえよう。

おわりに

アンケートに答えてくれた主婦の多くが、「主人」に○をつけながら、「あまり好きじゃないんだけど他にないから」「私古いから」「言いたくないからもごと口の中でごまかすの」と、「主人」と呼ぶことのこだわりを述べていた。「主従関係にあるなんて思っていないわ、単なる符号として呼んでいるだけよ」と肯定的な人、「夫婦は対等なんだから主人なんて言えないわ」とはっきり否定する人、配偶者の呼び方をめぐってさまざまな意識の違いが感じられた。

以上のいくつかの調査でわかったことは、「夫の呼称」として「主人」が使われだしてそれほど古くないこと、「主人」以外の呼び方がいくつもあったことである。その事実から考えれば、「主人」を絶対視する必要は全くないこと、「主人」が実情にあわなければいくらかもかえていいことに思い至る。しかもその動きも少しずつ萌していることである。いやだけれど他にいいのがないからと言わずに、いやなら他のことばをさがしてみる方がいい。単なる符号と割り切る向きには、「主人」が本来の意味を失っていない現状ではやはり符号ではすまされないことをわかってほしいと思うのである。

アンケートに記入している妻の傍らでそれをちょっとのぞきこみながら話してくれた60代後半と思われる配偶者の言葉を借りてこの報告を結びたい。

「ぼくは前からおかしいと思っていたんですよ。もう今は昔の夫婦関係と同じじゃないんだからいつまでも『主人』と言ってるのおかしいですよ。NHKで『ご主人』なんて平気で言ってるのも変だといつも思ってるんですよ。女の人もう少し考えた方がいいんじゃないですか。」（1985.10.1）